

《論文博士要旨》

古代日韓象嵌技術の系譜
—象嵌装飾出土遺物を中心に—

林 志暎

金属象嵌は、金属の地金に鑿で溝を彫り、金・銀などの金属象嵌線を嵌める技術である。本論文では、金属の材質にはじまり、金属線の製作、溝の彫刻、そしてそれを彫る鑿の製作など、象嵌製作に関わるすべての要素にもとづいて、日本列島の古墳時代と韓半島の三国時代の象嵌遺物を分類し、それらの技法的差異と類似点とを比較することによって、古代日韓における金属象嵌の製作工房やその系譜を探る。

金属象嵌は、その製作過程の特性上、肉眼観察による製作技法の特徴把握が困難である。それゆえ筆者は、象嵌遺物の肉眼観察にもとづきながらも、マイクロスコプやX線透過装置といった機器を積極的に利用することにより、象嵌遺物の技術的特徴把握とその製作実験との対比を通して、古墳時代および三国時代における金属象嵌技法の復元を試みた。この結果、古代日韓における金属象嵌技法において、象嵌溝には、従来指摘のある通り、蹴り彫りと毛彫り技法の二者があることを再確認し、一方、これまで指摘の少なかった象嵌線の製作技法について、鍛造のほか、巻きや振り、さらに折り技法といった多様な技法が存在することをはじめて明らかにした。

金属象嵌各技法の使用事例には、年代および地域差が認められる。そこで筆者は、象嵌溝と象嵌線の製作技法にもとづいて、それらの源流をユーラシア大陸に求めることで、韓半島の百済、新羅、伽耶、そして日本列島に至る象嵌技法の系譜を探究した。さらに、金製歩搖の起源ともかかわる細線細工技法の伝播ルートを参照しつつ、近年発掘調査されたロシアの初期鉄器時代の象嵌事例や、前漢代まで遡る中国象嵌銘文大刀などに基礎をおいて、各技法の組み合わせの年代的、地域的位置づけを整理することによって、古代日韓の象嵌技法へと至る系譜が、毛彫り技法の溝、巻きや振り技法の線の特徴とする「北方ルート」と、蹴り彫り技法の溝を特徴とする「中国ルート」の2つに分けられるとの仮説を提示した。

そして、その仮説の上に立って、日韓の金属象嵌遺物の技術的位置づけをとらえ直した場合、従来指摘されてきた、北方ないし中国から百済ないし伽耶を経由して日本へと至る伝播イメージとは異なり、その間には高句麗が介在した可能性のあることを新たに指摘した。

第I章の象嵌技法の定義では、金属象嵌とは何かについて、これまでの金属象嵌研究において扱われてきた従来の定義のもと、各々の技法と工程についての概略を説明する。さらに用語問題として、特に韓国で近年、象嵌に代わって使用され始めた「入糸」という用語についても触れた。

第II章では、本論の立論に最も重要な、象嵌における諸技法を解明する方法として製作実験を行う。実験は嵌入材料としての象嵌線製作と、嵌入部となる象嵌線を彫る鑿の製作、これによって形成された象嵌部の観察結果と出土遺物に残された痕跡とを比較する方法によって象嵌線の巻きや振りによる

製作技法、あるいは蹴り彫りや毛彫りによる象嵌溝の彫法などの解明を、実物観察とともに実体顕微鏡やX線透過撮影、X線CT画像の観察を並用して行う。

第Ⅲ章では、西アジアやヨーロッパの技法については先行研究に依拠しながら、韓国、日本の象嵌遺物については文献のみならず、実物資料を重視しながら、これまでの日韓において、鍛造や線引き以外に言及されていなかった、細線細工の製作技法について述べる。細線細工の技法は、金属象嵌においては嵌める対象となる金属線の製作技法に繋がる。金属線の表面に残る痕跡に着目し、近年、調査、報告された韓国の王宮里遺跡の工房廃棄地から出土した多くの加工中間段階の金片、金棒や金糸、細線の製作痕跡の観察から、金細工の製作過程を推定、各製作技法にもとづいて、細線細工遺物を「鍛造」、「板引き」、「引抜板」、「振り」、「巻き」、「折り」、「铸造」に分類、細線細工遺物の観察に関する新たな見解を整理してまとめた。

西アジアおよび地中海地域、スキタイから中央アジア地域、中国、韓国、日本の事例へと拡大して、特に、直径0.3~1mmの巻き、振りによる細線は、近くは中国三燕の遺跡として有名な房身、馮素弗墓出土冠飾りの細線装飾に用いられた製作技法と類似する。これらの細線の起源は、紀元前8世紀頃まで遡り、ギリシャ、エトルリアで技術上の全盛期に達する。また、黒海沿岸のクル・オバ遺跡やカザフスタンのイッシク古墳、ティリヤ・テペ4号墓の金装飾板の歩揺を繋ぐ金線としても使用されることから、細線製作技法によってその源流を探ることが可能である。

日韓における同技法は、韓半島では王宮里以前の象嵌大刀のほか、皇南大塚の金鈴、金象嵌釧にみられ、日本では6世紀後半以降、象嵌技法にのみ採用が確認される。

また、これまで言及されてきた、ロシア南部のサルマタイ出土金冠→アフガニスタンのティリヤ・テペ6号墓→中国の燕地域→遼西房身、十二臺→馮素弗墓→慶州皇南大塚、金冠塚→日本の藤ノ木、あるいは、房身2号金製方形板→皇南大塚→新沢千塚126号といった金製歩揺の起源についても、皇南大塚、金冠塚や新沢千塚126号出土の金線製作技法が、鍛造や板引きによるもので、金線の製作技法の面からはほかと異なり、少なくとも、房身、馮素弗墓まで繋がる振りや巻きによる金線の製作技法が、日韓の出土品には見られないことも明らかにした。

第Ⅳ章では、日本の古墳時代と韓半島の三国時代の出土象嵌遺物について、地域ごとの出土事例を紹介し、象嵌製作技法である象嵌溝と象嵌線による分類を行った。

取り上げた象嵌遺物は、肉眼ないしマイクロスコープによる観察、またはX線フィルム観察を行ったものである。韓半島出土遺物としては、高句麗地域の伝平安南道中和群出土金象嵌銅魁のほか2点、百済地域の瑞山副長里や天安花城里出土の大刀9点、鉄製装飾遺物2点、咸安道項里馬甲塚ほか伽耶地域出土の大刀16点や陝川玉田馬具1点、近年、報告書再刊行に伴い新たに発見された天馬塚など新羅地域出土の大刀6点と馬具3点をその対象とした。日本出土遺物は、象嵌位置ごとに掲げると、刀身部象嵌大刀12点、環頭や円頭、方頭、頭椎大刀19点、柄頭、鐔象嵌事例51点、鞍2点である。

象嵌溝による分類では、蹴り彫りと毛彫りの大きく2つに分類できる。韓半島においては、高句麗で蹴り彫りのみ、百済、新羅、伽耶では蹴り彫りと毛彫りが共存しており、その中でも新羅における蹴り彫り技法の出現が他の地域より若干遅れる傾向がある。日本における蹴り彫りの事例は、奈良県東大寺山古墳出土中平銘鉄刀に早く出現するが、それ以降は年代の離れた7世紀代の遺物に稀に確認できるのみである。蹴り彫り技法は、前漢代の象嵌銘文大刀にも確認でき、その技術の伝播ルートに

かかわる一つの根拠となる。

象嵌線に関しては、巻き技法が咸安道項里馬甲塚出土品にもっとも早く現れ、6世紀代に盛行、日本では6世紀前半に出現し、6世紀後半から7世紀前半にかけて盛行するという年代差を見出すことができる。また、新羅では、象嵌技法の出現が百済や伽耶よりやや遅れながらも、折り線など、特徴的な象嵌線の事例も確認できる。

第V章では、象嵌溝と象嵌線の製作技法をもとに、それらの源流を探ることで、高句麗、百済、伽耶、新羅、日本出土の象嵌技法の系譜を求めた。

まず、象嵌溝における蹴り彫り技法は、中国に求めることができる。前漢代の象嵌銘文大刀である江蘇省徐州市銅山県駝竜山出土建初二年銘金錯鉄劍(AD77年)、山東省蒼山県出土の永初六年銘金錯鉄刀(AD112年)など、すべて鉄地で蹴り彫り技法により文字の形の溝が彫られた事例であり、奈良県東大寺山古墳出土中平銘鉄刀も同技法による。また、事例も少なく、伝世品ではあるが、高句麗地域出土の遺物2点もともに蹴り彫り技法の象嵌である。新羅地域における蹴り彫り技法の出現が若干遅れるとはいえ、百済、新羅の両地域では蹴り彫り、毛彫りともに年代差なく共存するのに対し、日本においては、東大寺山古墳出土遺物を除くと、7世紀になるまで蹴り彫りの事例は確認できない。

毛彫り技法の象嵌の事例は、紀元前5～4世紀頃のロシアのフィリップポフカまで遡る。日韓出土遺物との直接的な関連を求めることには、やはり年代や地域的な隔りがあるが、全般的な金工技術などとともに北方ルートを紹介しての伝来を伺うことは可能といえる。

象嵌線については、特に巻きや振り技法を中心に言及が可能である。巻きや振り技法は、ギリシャ、エトルリアに発し、イッシク古墳、ティリヤ・テペ、内モンゴル達茂旗、遼寧省房身、喇嘛洞、馮素弗墓、甜草溝M1号へと繋がるその延長上に、高句麗をはじめとする韓半島の諸国があり、最後に日本列島へ至ったのだと考えられる。ただし、これまでの系譜論で根拠とされてきた、皇南大塚、金冠塚、藤ノ木、新沢千塚126号出土の金製歩揺連結線には、上記の技法を確認することはできない。むしろ、その技法は、韓半島においては6世紀から7世紀、日本では6世紀後半から7世紀代に出土する象嵌遺物において盛行することを明らかにした。

日韓における象嵌技法は、象嵌溝と象嵌線の製作技法から、北方ルートと中国ルートの2つに分けることが可能となる。前者は、毛彫り技法の溝と巻きや振り技法の線の特徴とし、後者は、蹴り彫り技法の溝によって特徴づけられる。

日韓における金製歩揺の起源とされる馮素弗墓、房身2号では、巻きや振り技法による金線が見られるのに対し、その延長上に位置づけられる皇南大塚、金冠塚、藤ノ木、新沢千塚126号にはそれがないこと、また、一貫して中国の影響を受けたとされてきた百済の環頭大刀において、同時期の中国で普及していた巻きや振り技法の象嵌線が、新羅や伽耶よりやや遅れるか、ほぼ同時期に出現すること、そして、日本列島において、巻きや振り技法の用いられた象嵌大刀が、6世紀後半になって東日本を中心として急激に増加することなどを本論は個別に明らかにしたが、この結果は、従来指摘されてきた日韓間の金工品の伝播のイメージとは異なる。

本論では、象嵌技術あるいは金工技法とその系譜に着眼した場合、高句麗の存在抜きには考えにくく、北方および中国ルートを紹介して日韓に象嵌技法が伝播するにあたって、高句麗が介在した可能

性のあることを対案として提示した。